

『もっと老上、ずっと老上～学ぶ楽しさ 人のあたたかさ 明日への希望 をみつける学校～』

2020年度 老上小学校だより No.15 (10月5日号)

老 おいっしょやま通信

①おきなめあてにむかって ②いどみ つづける子 ③か ながえ 深める子 ④み とめ つなげる子 (校長 山崎 賢)

(学校だより、学年通信・ほけんだより、行事予定、下校時刻などは老上小学校HPでもご覧になれます)

(レジリアンスを育むために)

きつとうまくいく

運動会が終わり、子どもたちの中にも何か一つやり切ったという満足感が窺えます。年度初めから、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、様々なことが中止や縮小を迫られ、学校だけでなく社会全体に閉塞感がある中で、子どもたちが自分たちのできることをがんばり、一つの形として表現できたことは、私たちも含めて貴重な経験であり学びであったと思います。



ただ、子どもたちの中には、言葉や表情に出さなくても、不安な気持ちで当日を迎えた人も少なからずいただろうと思います。また、運動会のような大きなイベントでなくても、日々の暮らしの中で不安を抱えている人は多くいます。うまくできなかつたらどうしようとか、他の人からどう見られているのだろうかなど、年を重ねたり客観的に見たりしたらさほど重大ではないように思えることでも、その当事者にとっては深刻かつ緊急の問題なのです。

でも、そこを乗り越える経験を積み重ねることで、次もうまくいきそうだという希望、また不安なことでもやってみたら何とかなるものだという自信が身についていくのです。学校での日々の学びや行事の多くは、そのような体験を積み上げる上でも大事な場でもあります。教科の知識理解だけでなく、人とかかわり方を学んだり、協力してやり遂げることでの達成感を味わえる場を、今の時期にたくさん溜め込んで社会に出てほしいと思うのは、私だけではないでしょう。

一方、社会生活ではそうそううまくいくことばかりではありません。むしろ思い通りにいかないことの方が多いかもかもしれません。それでもレジリエンスが高ければ、違う方法を試したり、工夫して乗り越えようとしたりすることができます。そこには「きつとうまくいく」という期待と希望があるからです。また一つの失敗がその人を否定することにはつながらないということを知っているからです。私たちは、子どもにこのような姿を期待したいのではないのでしょうか。

しかし、同じ状況にいても、不安の大きさの度合いは個人差が大きく、その時の気持ちの表出の仕方も様々です。どうしてもいかに分からなくて思うように言葉や行動に出せないことがあるかと思えば、求めていることと正反対の行動をしてみたり、また指示されている人に対して反抗的な態度をとってみたりするようなことも見られます。素直に、不安だとかここを手助けしてほしいとかいうことが本人にも具体的にわからないので、自分でも思ってもいない行動や言葉に出すことが多いのですが、周りから見ると



やる気がないとか反抗的・攻撃的だとかいうように見られがちです。

誰でも、初めてのことやうまくいかない結果が予想されることには不安があるものですが、それよりも好奇心や冒険心などが上回れば、挑戦する気持ちも高まります。そして、経験を積むことによって少しずつ克服していくことがふえてくるものです。たとえ失敗しても、参加できなくても、自分なりに努力したことに対して、他の人から何らかの励ましや称賛があれば、それが自信につながります。しかし、励ましという名の過剰な期待は、自分の能力がある程度自覚できてきた時には、かえって自信を失うことにもなるので、注意が必要です。



不安を取り除くために「成功している自分」を想像してみることも有効です。そして、想像したことを文字や言葉に表すことで、より効果が高まります。学校の授業で何かをする前に「うまくいった結果を想像して文章に書く」というような活動もその一つです。想像通りになれば、今後の活動にも見通しを持てるようになります。また、たとえ失敗して想像通りにならなくても、やってみたら何とかなったという安心感を得ることもできます。多くの子どもたちは、見通しが持てないことへの不安を持っていることが多いので、これからの予定を絵や言葉で見える化したり、最終的に目指すことを分かりやすく示したりすることなども有効な手立てです。

子どもが表出している望ましくない姿を見ると、つい注意したくなったり強制してでも大人の思うような行動をとらせたりしがちです。もちろんそれは、健全な社会生活を送るうえで大切なかわりであり教育であると思います。一方で、子どもは何に不安を感じているのかを思い描きながら、どこをどんなふうにするれば安心できるのかを探ることも大切です。そして、子どもと共に「きつとうまういく」という見通しと安心感を確認していけたらと思います。

◇◇シリーズ人権②◇◇（このコーナーでは「人権」について様々な例から考えていきます）

気付いている人が、自分から働きかけ続けることで身についていく

企業に限らず、仕事をする上で求める人材として、「あいさつができる人」「掃除ができる人」「人とやり取りができる人」などと言われることが多くあります。その中でも「あいさつ」はいつでもトップにきます。ですから、学校でも家庭でも「あいさつ」をするよう働きかけたり、指導したりしています。地域の人の声でも、「子どもたちが挨拶をよくしてくれる」などと評価を受けることもよくあります。

それでも、いくらこちらから声をかけてもが相手からは返ってこないこともよくあります。子どもが思春期になれば家庭内でも挨拶をしないことも多くあるでしょう。ついつい「あいさつぐらいしなさい」と厳しめに言っても、かえって反抗するだけです。でも、大人もそういう時期はあったはずです。今あいさつや掃除がしっかりできるかどうかよりも、それを大事にしている文化を私たちが伝えていくことが大事なのだと思います。

今後、生活様式が変化していくと、今大事にしていることがまた違った視点で見られることになるかもしれません。でも、大事なことだと気づいているのなら、相手に見返りを求めるより先に、こちらから笑顔であいさつをすることを続けていきたいものです。

かつて、部落解放同盟滋賀県連合会初代委員長の（故）上田一夫氏は、「報いられるを期待せぬ愛情と献身」を信条とされていました。私たちは、ついつい自分が何かしたときには見返りを求めがちです。でも、いくら大事なことだと自分が思っているでも報いられないことはたくさんあります。それでも、大

事なことだと気付いている人が、自分から働き続けることが大切なのではないでしょうか。